

令和2年度第4回横浜市創造界限形成推進委員会会議録	
日 時	令和3年1月22日（金）15時00分～16時40分
開催場所	WEB会議形式（事務局設置：横浜市役所18階共用会議室みなと4）
出席者	野原委員長、六川副委員長、岡本委員、菅野委員、重松委員、日沼委員、簗谷委員、山口委員、恵良氏
欠席者	遠藤委員
開催形態	一部非公開
議 題	1 報告事項 （1）今後の創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について （2）特別分科会の実施報告について
決定事項	
事務局	<p>【開会】 ○令和2年度第4回横浜市創造界限形成推進委員会を開始する。</p>
事務局	<p>【資料確認】 ○配付資料の確認が行われた。</p>
事務局	<p>【定足数の確認】 ○委員9名中8名が出席しており、委員会の成立となる。</p>
事務局	<p>【会議の公開・非公開】 ○本会議は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条により原則公開となるが、報告事項（2）「特別分科会の実施報告について」は、同条例第7条第2項第5号に当たるため非公開とするが、よろしいか。 （了承）</p>
野原委員長	<p>【分科会委員の指名について】 ○旧老松会館事業評価及び運営団体選考分科会委員について、旧老松会館事業評価及び運営団体選考分科会の設置及び運営に関する要領第3条に基づき新たに委員1名を指名した。</p> <p>報告事項（1）：今後の創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について ＜事務局より説明が行われ、議題について意見交換が行われた。＞</p>
野原委員長	○ここまでの説明について、質問や意見はあるか。
菅野委員	○今取りまとめている全体の方向性に関してもそうですが、横浜市全体のあるべき姿に関しては、もう少し上のレベルを設定していくということと、市民の参加の裾野を広げていくという、両方の作業が必要になってくるかと思った。この突破口をどう切り開いていく

	<p>恵良氏</p>	<p>かは、一つは国際性。常に刺激を受けるという点で、交流をもっとやっていたらいい。今はコロナ禍でこういった発想がしにくいですが、それでもオンラインツールを使って、海外の方たちとディスカッションできるような場や、お互いに刺激をもたらすような場、あるいはプラットフォームを横浜市の中で作っていく方向性が、必要ではないかと強く感じている。停滞感を感じる原因やこれまで積み上げてきたものを次のステップに向けてどうしていくかを考えると、グローバルな部分とローカルな部分をどう繋げていくかが重要だと思う。</p> <p>○創造限界が中心の議論ですが、その前に創造都市政策の大きなコンセプトや全体のスキームが共有されていると、アクションプランを定めるときにうまくいくかと思う。民間施設、企業、市民、公営文化芸術施設やACYなども含めた全体がどうなっているのかを念頭に置きながら、創造限界の施策を考えていくのが良い。それぞれの拠点がいくつかの方向性を示しているのので、これを整理していくと何か具体的なプロジェクトに引っかけて動いていくものがあると思う。対象範囲も少し広げていくと、大使館的な海外機関も視野に入ったり、クリエイターの幅も広がったり、地域の捉え方も変化したりする。それぞれ話し相手によって、色々な答えが得られるだろう。</p> <p>また、創造産業の出口について、調査結果を踏まえてクリエイターの活動分野の広がりへ誘導すべきか、出口はどこかを描いていくことになると思うが、横浜の産業施策と通底する方向性を持った方が、妥当性があると思う。例えば、今後の成長分野であれば、SDGsを踏まえた次の時代の産業への参画、環境分野、まちづくり分野や社会基盤でもある医療、教育、福祉分野もあると思う。</p> <p>また、今後の創造限界拠点の成果の評価指標や効果測定があるとより認知されやすくなり、政策判断しやすくなるので、非常に難しい問題ではあるが、どこかで取り組む必要があると感じている。</p>
	<p>山口委員</p>	<p>○方向性案を見ると、国際性や海外との繋がりをはっきり出されているのは非常に素晴らしいと感じた。現在は移動に制限がかかっているのは非常にすばらしいと感じた。現在は移動に制限がかかっている、今後どのようにモビリティを確保し、新しい形でコミュニケーションをとっていくかというのは、アーティストやアーティストを支援する側、文化芸術に関わる人たちにとっては非常に大きな問題であり、これについて横浜市として、パイロット的なプロジェクトやアイデア、イニシアチブを取ると、とても良いと思う。例えば、海外の先進的な創造都市と姉妹都市関係を結ぶとか、コンスタントにコミュニケーションを取るプログラムをつくるなど、いろいろやり方はあると思う。</p> <p>「世界のトップレベル」との繋がりとはどのようなイメージか。</p>
	<p>事務局</p>	<p>○有識者へのヒアリングでは、例えばデザイン業界で活動している方は多くいるが、世界的に影響力がある人や世界のトップクラスの人と交流できる場という部分が、アジアやヨーロッパの他都市に比べて、横</p>

		浜は弱いという意見を複数頂いており、こういった部分を補完できると良い。
山口委員	○ならば、間をつなぐ役割を果たすのは、分野によって制作者やプロデューサー、コーディネーターなどがある。こういう人たちも含めて、育成の対象とし、彼らが経験を積めるような機会をつくることを考えても良いかもしれない。	
六川委員	○横浜市のこういう仕掛けがあったからこそ、クリエイターが集積して、起業して、横浜で仕事がある、あるいはここで事業ができる、そんな横浜になってきていると思う。国際性的の話があったが、横浜はポテンシャルが非常に豊かなので、発展的に考えて良い。全体的には、少し表現が硬いような気がするので、もっと市民や事業者が参加しやすい、事業展開をしていくと、可能性がもっと広がるのではないかと思う。	
恵良氏	○国際性的の話では、一般論で海外ネットワークをやっても難しいと思う。ある程度テーマを絞ると関わる人も変わってくる。そうした人の情報を得ながら進めていければと思う。また、創造界隈拠点の役割だが、全体をプロデュースする仕掛ける側の視点では、例えば人なのか、組織なのか、仕組みなのかを考えることもあると思うので、次のステージでの議論を期待している。そして、創造都市の広報やブランディングの戦略的な方法を考えていくことになるだろう。	
重松委員	○言葉がとても重要。議論を重ねて、様々なあるべき姿や方向性が見えてきていると思うが、横浜の目指す姿を一言で表す言葉が必要なのではないか。例えば、株式会社 JINS は、行政と大学と地元企業を絡めて群馬イノベーションアワードをつくり、街の活性化のために動いている。このアワードのタイトルが「群を抜け」。要するに開業者を増加させる目標を、この一言で表している。また、ドイツのメルケル首相も「ドイツの文化を応援します」、「アートを応援します」と一言で言っている。細かい文章で説明されるよりも、その一言を魅力に感じ、人々が惹かれることは多いのではないかと思う。最終的には、方向性を表す言葉をつくっていただけたら良いと思っている。	
岡本委員	○国際交流については、資料を読む限り、デザイン分野でのトップレベルとの交流に課題があると理解した。というのも、例えばアートであれば、既に横浜トリエンナーレや TPAM などには、まさにトップレベルの方々が十分に参加されている。きちんと交流できる機会が既にあるので、そこをもっと活用してはどうか。漠然としているとしっかりした交流機会を個々がつくるのは難しいかもしれないが、例えば、拠点に関わるアーティスト限定の交流の機会をつくってもらうなど、これに対する支援は不可能ではないと思う。	
日沼委員	○コロナ禍での新しい生活様式が、アーティスト・クリエイターたちにとって、必ずしもマイナスだったかという、そうでない。昨今、例えば芸術祭などを中心に活動していたアーティスト・クリエイターに	

	<p> とっては、本当に忙しく、次々と働かないと自分たちが生活できない、という循環に追い詰められてきた 10 年間だったのではないかと感じている。コロナ禍では、一旦立ち止まり、何が必要かをじっくり考えるための時間と契機を得ることができたのではないか。これを踏まえると、目指すべき姿にある「活発な活動が次々に起こっていく」というのは、むしろ「持続可能性」な状況をどうつくっていくか、とした方が、実は好循環によりつながっていくのではないかと考えている。数ではなく、長期的に、あるいは定住につながるような、ゆったりとした営みがここに着地する、その長期的な活動を支えるといった好循環と捉えた方が、より今日的なメッセージになるのではないか。もちろん、芸術祭を否定するわけではないが、創造活動をする人たちにとって、ゆったりと考える時間、長期的なスパンで成果を出して良いという環境があるのは最も大事なこと。都市という、忙しく何か動いているということに魅力を感じて集まるクリエイター・アーティストもいると思うが、アートにとってはもっと長期的な展望をメッセージとして与えられるような姿を横浜に取り入れていただければ非常に良いのではないかと思った。 </p> <p> 事務局 ○日沼委員が仰った内容は、アーティストの方々と接する中で実感しているところ。目指すべき姿の「活発な創造活動」では、横浜で活動していく中で、しっかり収入を得て、かつそれぞれのアーティスト・クリエイターの方々の価値観、考えに基づいた作品を生み出し、それがまた広くマーケットに出ていくという循環性も意識している。もう少し分かりやすく書くこと、あるいは具体的な検討の中で考えていければと思う。 </p> <p> 菅野委員 ○国際性において、イベントなどのやり方では、オーストリア／リンツのアルス・エレクトロニカフェスティバルが参考になる。当初はブルックナーという作曲家のためのフェスティバルだったのが、今はメディアアートのフェスティバルとなっている。リンツはかつて工業都市であり、それが衰退してきた時に、文化イベントに切り替えた歴史がある。プログラムの考え方が、もちろんフェスティバルではあるが、その中に持続性などの視点を盛り込んでおり、非常にうまく考えられている。フェスティバルの前日には、リンツ市内の子供たちが無料で見に来ることができ、これは教育との関係性を生んでいる。他にもメディアアートの展示のためのセンターやラボも作っている。世界からメディアアートの人たちを呼んで、滞在してもらい、いろいろな実験をするラボで「フューチャー・ラボ」という。会期中は、世界中から関心を持っている人が集まり、メディアアートの最前線や現状を知るためのワークショップがたくさん開かれ、知的な刺激の場にもなっている。教育や情報交換、実験性、継続性、フェスティバルの魅力をどのように持続させていくか。それが今、アルス・エレクトロニカ・ジ </p>
--	---

	<p>事務局</p> <p>野原委員長</p> <p>事務局</p>	<p>ヤパンとして実施され、国外にもフェスティバルのやり方がある種売り込んでいる。一つのプログラムがどのようにサステナビリティと魅力とレベルを高め、市民の人に広げていくかを考えてつくられている。もちろんこれは1年でできているわけではなく、20年、30年かけて今の形になっているので、こういった考え方は、これからの横浜のクリエイティビティを広げていく上で重要ではないかと思った。</p> <p>○あるものを磨いて、ないものをつくるということが重要だと思う。イベント系で言えば、横浜トリエンナーレや TPAM などを磨きにかけていく。創造界限拠点で言えば、BankART1929 は AIR を通じて東アジアと、黄金町は ASEAN、東南アジアとつながっている。象の鼻テラスでは、横浜の姉妹港との交流事業をやっているの、既にいろいろな取組がある。加えて、海外都市を参考にしながら、新しい事業も仕掛けていくこと。そのあたりをもう一度見直しても良いと感じた。</p> <p>○5つの目指す姿を出していただいているが、同時に「How」、どのようにそれをやるのかを併せて考えることが大事。それぞれの項目について、一步踏み込んだ形で検討される上で、具体的にどのようにやっていくかを考えつつ、もう一回目指すべき方向を見直してみるとより分かりやすくなるかと思う。また、最近アーバンデザインセンターという、公民学連携の拠点において、まちづくりを進めていく話が盛んに行われている。世界の同様のセンターでは、そこに行くと一目でその都市の最前線の都市戦略や都市情報が分かる。横浜市でも、創造都市施策をこれだけやっているの、どこかへ行ったら一目で理解できるというような「分かりやすさ」や「伝え方の工夫」があっても良いかと思った。</p> <p>報告事項（2）：特別分科会の実施報告について <事務局より説明が行われ、議題について意見交換が行われた。></p> <p><事務局から議事録の確認依頼や今後のスケジュールなどについて、事務連絡が行われた。></p> <p>○これをもって、第4回横浜市創造界限形成推進委員会を終了する。委員の皆様、長時間ありがとうございました。</p>
資料		<p>①次第</p> <p>② [資料1] 委員名簿</p> <p>③ [資料2] 委員会議事録（令和2年10月21日、11月19日開催分）</p> <p>④ [資料3] 「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について</p> <p>⑤ [資料4] 特別分科会の実施報告について</p>
特記事項		